

0851 那須/VR：朝日岳東南稜敗退

【期日】2009. 2.7(土)～8(日) 【参加者】山野，松本，尾崎

当日は強風で敗退，下山中に滑落者の救助依頼を受けた。敗退を決めた時と救助依頼の一致のタイミングは不思議でもある。以下，ホームページの記録を記載します。

●那須より，下山連絡あり（島田）

17:50 分頃、大丸温泉へ無事下山したと連絡がありました。ただし、強風で引き返す途中、別パーティーの滑落者の救助を行ったということです。滑落した方は意識もあり救急車で搬送されたとのこと。

下界もかなりの強風でした。大変であったろうと思われます。詳しい状況など、教えてください。

●まずご連絡 （尾崎）

島田君連絡先ありがとうございました。電話が遅くなってすみませんでした。私達も強風のため朝日岳には登れませんでした。

下山報告にあるとおり，救助を手伝いまして，近いうちに詳細を報告します。事故者は外傷や出血もなく意識ははっきりしていたし，車道まで登りも無く近かったので，救助側にとっても幸運といえば幸運でした。

私の感じていることは，救助経験の立場だけでなく，山行前に自分の緊張感が無かったことを山に見透かされた気持ちや，事故が他人事と思えないことなどで，気持ちが萎んでいます。まさに他山の石だということも確かです。

事故パーティーのリーダーから電話がありました。事故の方，命には別状無いそうです。ただし，肋骨，鎖骨，背骨骨折とのこと。山野さん，松本さんにもお礼を伝えてくださいと言われました。

●反省 （松本）

山野さん、尾崎さん 本当に御苦労さまでした。

私にとっては、緊張感なく、ということにはなかったです。メンバーに頼っていたということはあるかもしれませんが。久々の冬の岩場ということでそれなりに緊張はしていました。天気はまったくの誤算でした。小さな低気圧が北部を通過することは予想されていたのですが、それほど発達せず、すぐに次の高気圧に覆われるという予想でした。したがって、暖かい日差しのなか、楽しい岩登りを考えていたのは事実です。それを甘かったと言え言えるでしょう。予想に反し、低気圧が発達し、短時間でしたが、強い冬型になり、各地で強風を発生させた。ただでさえ、強風で有名な那須岳ですので、結構厳しい気象条件になりました。現地でも、天気が回復する期待を持って、取り付きまで行ったのですが、回復の兆しが見られないことから登攀を中止した判断は間違っていなかったと思います。

登攀をあきらめて、早めにおりて、温泉に入って帰ろうと強風にあおられながら下っていると、下からひとり岩場に落ちて動けないので救助をお願いしたいと要請がありました。事故を起こした3人パーティの残りの2人と、別パーティの4人、我々3人の8人で、簡単に役割分担をして、登攀装備を持っている我々がとにかく現場に向かうということにしました。

その活動で一番の問題点は、二重遭難を起こしかけたことでしょう。尾崎さんと私が遭難現場まで懸垂下降をしている間に、最初から遭難救助に加わっておられた別のパーティの方が一名、突風にあおられて、バランスを崩し、同じ岩場を落ちてしまいました。幸いなことに、岩場の傾斜がきつく、直接下の雪に落ちたので、まったくけががありませんでした。落差は10m以上ありましたので、もし、あの時点で、もう一名、動けない状態になった場合は、救助は明るいうちには終了せず、かなり厳しい状況になったと思われます。

その場の救助活動は、混成部隊ですので、それぞれの力量の範囲で、できることを行うことになるのですが、安全確保を確実に行って、絶対に二重遭難は起こさないという確認が不足していました。浮き足だっていたといわれても仕方がない状況です。その場所は、何でもないうるい斜面ですが、下の岩場と強風を考えて、セルフビレイをきちんととるとというのが後から考えた最良解ですが、そこまで考えて指示をすることはできませんでした。

そのあとの救助活動も、あれでよかったのかという反省点はいくつかあります。私自身の問題としては、十分に確認や意思疎通をしないで、動きを始めてしまう欠点があるのは自覚しているのですが、今回もその面が出てしまいました。

結果的には最短時間に近い形で、収容できました。自分で言う話ではありませんが、私たちのような登攀装備を持ったパーティがあつた場所をあつた時間に居合わせたこと自体が非常に幸運だつ

たと言えると思います。

●遭難救助 (山野)

松本さん、尾崎さん遭難救助ご苦労さんでした。那須の風については強風でたびたび滑落が起きていることは知っていましたが、実際に突風になると耐風姿勢をとってもあおられることがたびたびでした。後で聞いたら那須の風は一度吹き出すと 24 時間続くとのことで、そのうち弱まるかもしれないと朝日岳東南稜に取りつこうとしたのは甘かったかも。引き返したのは賢明だったと思います。

遭難されたのは早稲田大学 WV 部 OB の 64 歳のかたで緑山岳会にも所属されていたベテランのかたのようでした。3 名で朝日岳東南稜を目指しておられました。1600m 付近の一般道のところで、突風にあおられ雪原を滑り出し、ピッケルストップをしたが止まれず、ピッケルも飛ばされたそうです。雪原の傾斜はそれほどではなかったのですが、すぐ下が約 10m の崖になっていてそこを落ちて下の雪で止まっていました。早稲田 WV 部 OB の 3 人パーティの残りの 2 人はザイルももっておられ、落ちた人と声で話を交わして意識がはっきりされていることを確認されてました。我々 3 人と、他に北稜山学会の 4 人パーティ（うち 2 人は女性）が手助けしました。簡単に役割分担をきめました。

まず携帯電話で警察に連絡し、救助を依頼しました。携帯電話は便利ですね。救助の段階でパーティアが 3 つに別れましたが、お互いの連絡が良くとれなかったのですが、あの場所ではもっと携帯電話を活用すべきだったかもしれません。ただ低温で電池の性能が落ちていたのが気になりあまりつかいませんでした。予備の電源も必要かも。

遭難の崖の上の木にザイルを固定して、尾崎さん、松本さんの順で崖の下に下りて遭難者の所に行きました。痛がっていましたが意識ははっきりしていました。その間北稜山岳会の方が崖の端から下の遭難者を見ていて風にあおられ 10m の崖を落ちましたが幸い怪我もなく、救助に加わりました。二重遭難になるところでした。ピッケルを使つてのセルフビレーをすべきところでした。

遭難者の肩を支えながら約 10m 歩き、風の少ない平らな場所に移動し、遭難者をザックやツェルトでくるんで暖かくしました。その時に山野も遭難者の所に下りて行きました。その後、松本さん、尾崎さんが下の方からまわって上の道にでて、救助隊との連絡をとったり一緒に戻ってきました。

山野は北稜山岳会の人と遭難者の所に残って励ましました。胸が痛いと言っていました。途中で

から煙草を吸わせると気がまぎれて少し元気になりました。そのうち松本さんが早稲田 WV 部 OB の仲間を連れてきたので、遭難者は非常に安心したようです。

救助隊は地元那須山岳会の遭難対策隊のメンバーと警察消防の人で 10 人位きました。スノーボードに乗せて崖の下の元林道の所を下しましたが、斜面のトラバーをスノーボードを支えながらは結構大変でした。山野はすぐ息が上がって脱落しましたが、何とか明るいうちに大丸温泉までおろして救急車で那須塩原市内の病院に運ばれて行きました。

我々 3 人は峠の茶屋付近あずま屋の中にテントを張って止まっていたので、荷物を回収して下りました。大丸温泉のおおたか旅館のご主人が那須山^{とろ}学会の会長で、遭難救助の拠点になっていました。地元の情報も事前によく調べる必要があると思います。朝日岳東南稜は岩も脆いので登山禁止したいくらいだと話されていました。今回は我々も風にあおられる可能性もあり気をつけていかなければと改めて思いました。山野はビーコンも持っていませんでした。

松本さん、尾崎さんは何度も現場を往復したり、ご苦労さんでした。

●遭難救助について (島田)

山野さん、松本さん、尾崎先輩、本当にお疲れ様でした。早い時点でのご報告をいただきありがとうございました。読んでいて現場の様子が思い浮かびます。

強風の冬山での体力消耗を考えると、短時間で収容できたことは良かったのでしょうか（参考として良かった面についても知りたいです）。セルフビレイをせず二重遭難になりかけたこと、混成部隊で十分な意思疎通を基に救助にあたるのが難しかったことが分かりました。

●那須の強風 (青谷)

高校時代に、那須の強風には苦労したことを思い出します。都内でも風があり、どうかなと思っていましたが、やはり甘くなかったですね。救助活動および詳細のご報告、ご苦労様でした。

●追記 (尾崎)

当時の行動概要をエクセルにまとめました。

<天候について>

当日は未明よりすごく風が強く、東南稜へ向けて登る最中よりバランスを崩しそうになることも多いくらいで、引き返してきたのは正しかったと思う。

風の吹き方が一定でなく、ほとんど強風が吹き続けていたが、瞬間的にきわめて強い突風が吹き、そのとき体が何度も持っていかれそうになった。しかし止んだかと思うときもあるくらい。

年末の聖東尾根のように、一定方向の強風が吹き続けるなら、それに身を任せることも出来るが、不規則なため瞬間的にあおられた。山野さん、松本さんが指摘しているように、見た目安定しているところでも、セルフビレイは非常に重要でした。

<よかったこと>

- ・滑落第一報を聞いたとき、居合わせた者が全員一度集まり、方針を確認した。
- ・単独行動しなかった。
- ・伝令役、待機役、滑落現場救助役に分かれる形で、ある程度チームワークができた。
- ・待機場所2では穴を掘ってツェルトをかぶることで、1時間半くらい強風の元でも、ほとんど寒くなかった。

<岩場を懸垂下降で降りて>

灌木に 50m ロープ末端を直接エイトノット+1 回転（ハーネスにメインロープを結ぶのと同じ方法）で結びつけ、結び目が締まって回収不能にならないように、エイトノット内にカラビナを掛けておいてもらった。ロープシングルで懸垂下降で降りた。

救助者が1名だけだと、何も出来なかった。励まして、上からツェルト掛けて保温するくらい。あそこまで痛がる事故者に、どうしてあげればよいのかわからず、付き添うことしかできなかった。頭で分かっていることも本当にそれでよいのか躊躇してしまう。その後、松本さん、北稜・人見氏、山野さんの順で来たので何とかできた。このとき、尾崎は人見氏が落ちたものとは全く知らなかった。

<岩場の登り返し>

松本さん、山野さん、北稜山岳会人見氏、尾崎で事故者の応急的な保温、ツェルト保護をしたあと、松本さんと尾崎は登山道に登り返して、待機組に現状を伝えるため、少し巻いて別の岩場に登り返そうとしたが、そもそも技術が無いだけかもしれないが、気持ちが落ち着かず登れそうな岩場も全く登れなかった。

正直言って、ショックだった。これじゃ東南稜なんて好天でも登れないんじゃないかと。しかし、二重遭難できない気持ち、時間的な焦りの気持ち、など、別パーティの事故とはいえ、事故に関わっている以上、気持ちの動転があった。

中間支点を取ることも頭になかったので、やはり冷静さを失っていました。緊急時はそんなも

のかもしれない。だから登れなかったのかもしれないと思う。

当たり前かもしれないが、救助方法やルートなどはもっとも容易で安全な方法を選ぶ必要があること。しかし現場で、何がベストな方法か判断するのは本当に難しいです。

<登山道に登り返して待機場所 2 での待機について>

早稲田 OB の山本氏・栗原氏、北稜山岳会の加藤氏と合流し、松本さんと山本氏は再び事故者のもとへ行った。栗原氏、加藤氏、尾崎の 3 人は、救助隊がこちらに来た場合、ここから下ってもらうように伝えるため待機した。

雪面を L 字状に掘ってツエルトをかぶったので、寒さほとんど感じなかった。よく言われていることではあるが、ツエルトの有効性を実感した。

このとき、だれもスコップを持っていなかった。尾崎はスコップを家に忘れてきた。ピッケルのブレードで掘ることは出来た。自分のツエルトは救助に提供済みだったので、役割の分配前に必要なものを互いに確認しあうことが必要だと思った。たまたま、一緒に待機に入った北稜山岳会の加藤氏が持っていたから良かったが、松本さんたちと別れる前に確認すべきだった。事故者一人でも、事故者の保温でツエルト 2 個くらい、伝令役がツエルト 1 個、待機役で 1 個などと考えると、ツエルトは個人装備くらいの数があってもよいのか？それでは過剰装備？

いずれにしろ、朝の出発時、今日はアタックだから何が必要何が不要と決まりきって荷造りするのでなく、今日は風が強いからとか、その状況に応じた荷物の判断は必要となると思う。

また、別行動に分かれる際は、分かれる理由が有るからなので、それは全員確認する。しかし、分かれた後どう意思疎通をするか、どう再合流するかを確認するのを忘れがちになった。これは必ず確認・合意しておくことが必要。

ツエルト内で待機中、早稲田・栗原氏より互いの連絡先の確認を求められ、西朋は尾崎が対応した。

<無線機を持っていた>

しかし、免許をもたないこと、それ以上に使い方を熟知していなかったもので、スムーズにいかず、結局使わなかった。携帯電話が通じたから今回は良かったが、やはり無線機をちゃんと使えるようにしておきたい。

<セルフレスキュー、シート搬送について>

事故者は意識ははっきりして、話も出来たが、呼吸、脈拍などチェックすべきだったかもし

れない。保温や底面の厚さは大丈夫だったとか、事故者のひざ下にもクッションになるものを入れてあげるべきだったとか、梱包方法の問題もある。後からいろいろ反省がある。搬送時は、搬送者がピッケルを持っているとシートとの位置関係によっては事故者を刺してしまいそうになり、危険を感じた。アイゼンも同様で、これは前後の位置関係にある搬送者相互で足を踏んでしまいそうになり、バランスを崩した。搬送速度はゆっくりでないとこういう危険が高まると思った。

なお今回は、土曜日にビーコン練習もしました。結局、セルフレスキュー実践訓練山行になってしまいました。良い経験だったかも知れませんが、自分も何度も風に体をもっていかれていたので、とても他人事でなく、考えさせられました。自分たちの事故ではないとはいえ、やはり、緊急連絡先の島田君に電話した時は、やはり皆さんのバックアップがあるんだと、心強かったのです。

推定時刻	山野	松本	尾崎	北稜人見氏	北稜加藤氏	早稲田栗原氏	早稲田山本氏	北稜女性2名	救助隊7名
11時過ぎ	全員集まり役割分担、一人行動はしないこと確認								携帯で119番
	救助へ	救助へ	救助へ	突風で崖から落ちるが無事	登山道待機 1	登山道待機 1	崖上待機	大丸温泉へ下山、救助要請	
	滑落者介助	滑落者介助	滑落者介助	滑落者介助	↓	↓	登山道待機 1	↓	
	↓	岩場巻いて登山道へ戻る	岩場巻いて登山道へ戻る	↓	↓	↓	↓	↓	
	↓	状況確認	状況確認	↓	状況確認	状況確認	状況確認	↓	
	↓	登返し・山道合流地点に戻る	登返し・山道合流地点に戻る	↓	登返し・山道合流地点に戻る	登返し・山道合流地点に戻る	登返し・山道合流地点に戻る	↓	
13時～14時半	↓	事故者の所へ	登山道待機 2	↓	登山道待機 2	登山道待機 2	事故者の所へ	↓	
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	先発隊到着
15時前後	↓	登山道待機 2へ	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
15時半	↓	事故者の所へ	事故者の所へ	↓	事故者の所へ	事故者の所へ		↓	後発隊到着
	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	↓	事故者搬送
	幕営装備回収	幕営装備回収	幕営装備回収	↓	↓	↓	↓	↓	↓
17時～17時半	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉